

旧約詩編第5巻の構成と主題

飯 謙

On the Composition and the Theme of Book V of the Psalter (Pss. 107-150)

II Ken

要 旨

本稿は、旧約詩編の終結部となる第5巻（詩107-150編）の構成と主題を考察するため、その研究史を通して問題点の整理をすることを目的とする。筆者はその探究のため、主導的な研究をした人物をあげ、その特徴を追った。G. H. Wilson は旧約詩編の編集史的研究を最初に行った。彼は、作品の形態上の特徴から第5巻を詩編107-117, 118-135, 136-145編の三部に分けた。筆者はこの賛同者についても紹介した。他面その仮説だけでは、旧約詩編第5巻が担う神学思想について十分説明できないとする研究方向の問題点にも言及した。M. D. Goulder は、旧約詩編第5巻が捕囚後に一回的に行われた祭儀の典礼用テキストで、詩編105-119, 120-134, 135-150編に分割されるとして解釈を行っている。筆者は彼の見解に対して旧約詩編の編集史の立場から時代的な齟齬を指摘した。すなわち、彼が成立時期をバビロニア時代とするのに対し、実際の編集年代が紀元前後に設定されるとして、この仮説の不整合性を述べた。E. Zenger は旧約詩編第5巻に交差配列的な構造を見出した。それは、a. 詩編107-112, b. 113-118, c. 119, b'. 120-137, a'. 138-145編とするものである。筆者はその構造の中に対応部の量的、語彙的な不均衡が存在することを述べ、当該テキストの解釈に不十分な仮説であると批判した。K. Nielsen の研究は旧約詩編第5巻全体を視野に納めたものではないため、限定的な議論になっている。筆者はこの点を指摘した上で、彼女の研究が詩編119編と120編以下の関係について明快な区切りを語っていることを評価した。これらの考察の結果、筆者は旧約詩編第5巻について、以下のような研究の指針と今後の課題を提示した。

- 1) 当該テキストは、標題によって区分される小詩集を軸に分析されるべきである。
- 2) 小詩集の単位で各作品間の結束性を研究する中で第5巻全体のメッセージを考察する。
- 3) Zenger の示唆を受けた二つの「進展」を解釈の鍵とする。

キーワード：旧約詩編第5巻、旧約詩編の編集史、旧約詩編の配列、死海文書、ヘレニズム期ユダヤ教の諸派

Abstract

In this paper, I have examined an investigative history of Book V of Psalter (Pss. 107-150) to consider its composition and theme. I listed some scholars who have taken the initiative in this field.

- 1) G. H. Wilson divided the text of Book V into three groups, Pss. 107-117, 118-135, 136-145. His point of view concentrated on the form of the individual psalms, so he did not analyze their theological thought.
- 2) According to a proposal by M. D. Goulder, Book V was a liturgical text that was used only once for a Jewish festival ceremony after exile, the so-called Persian era. He divided the text into Pss. 105-119, 120-134, 135-150. His opinion was found to be unacceptable in the discussion over the formative time of the Psalter, ca. the first century CE.
- 3) E. Zenger pointed out a chiastic structure in Book V, that is, a) Pss. 107-112, b) 113-118, c) 119, b') 120-137, a') 138-145. I detected an unbalance of the structure in the level of vocabulary and quantities of Psalms. I concluded that his hypotheses were inadequate to argue the theology of Book V.

From these complicated arguments, I have made a suggestion to accept the psalms groups that the Psalter denotes by the superscriptions in the end form (the so-called Masora Text), that is, the opening Ps. 107; the fourth Davidic Pss. 108-110; the Acrostic Pss. 111-112; the Egyptian Hallel Pss. 113-118; the Acrostic Ps 119; the Ma'aloth Pss. 120-134; the Non-superscription Pss. 135-137; the fifth Davidic Pss. 138-145; and the ending Hallel Pss. 146-150.

Key words: Book V of the Psalter, redaction of the Psalter, Contextual reading of the Psalter, the Dead Sea Scrolls, Sects of Judaism in the Hellenistic era

0. はじめに

われわれは、旧約詩編が種々の作品を意図的に配列した連作的な「読み物」であるとの認識から、テキストの分析を行ってきた。その結果、旧約詩編の冒頭に展開される、いわゆる第1ダビデ詩編が、従来考えられてきたような、古代エルサレム神殿のための讃歌集として解されるよりも、むしろ神殿崩壊後の信仰を導く編集体として、「脱神殿」とでも性格づけられる通読用の歌集であることを指摘した¹⁾。また旧約詩編を締め括る作品群、すなわちマアロート歌集(詩120-134編)と、それに続く無表題の詩編(詩135-137編)およびダビデ詩編(詩138-145編)とハレルヤ詩集(詩146-150編)にも同様の性格が認められることを論じてきた²⁾。

では、旧約詩編はどのような過程で成立した文書なのであろうか。われわれの認識によれば、旧約詩編は、元来、個別に創作された古代イスラエルの宗教詩が内容的に連関する数作品でまとめられて小集合(Kleingruppe)を形成し、それらが組み合わされて小詩集(Kleinpsalter)となり、さらに上位の編集を経て現在の形態へと至った。伝統的な詩編の5巻区分は、その痕跡を示すと言える。上に述べたように、われわれはこれまでにマアロート歌集から旧約詩編全体を締め括るハレルヤ詩集までの作品(詩120-150編)を取り上げた。これらは旧約詩編第5巻の後半にあたる。であるならば、それらの作品群と第5巻の前半(詩107-119編)との関係はどのように説明されるのであろうか。この解明は、第5巻はもちろんのこと、旧約詩編全体の意図性を理解する上でも非常に重要な要素である。

しかしながら、これまでの詩編第5巻に関する研究は、詩編119編までと120編以下との関係について十分に取り組んできたとは言えない。旧約詩編の形成史を探究した最初期の人物である C. Westermann は、旧約詩編成立のある段階で詩編1編と119編とが律法の詩編として外枠を構成したことを指摘し、その上で120編以下が補遺として付されたと一気に述べているが、1-119編と120編以下の関係については論じていない³⁾。ここで繰り返すまでもなく、詩編1編と119編との密接な関係は明らかである。両者の一致点として、次のことがあげられる⁴⁾。

- ①双方とも「幸いあれ」(‘šrj) に始まり、「消え去る」(‘bd) を含む語に終わる。
- ②双方とも「主の律法」(twrt Jhwh) を用いる。これは他に詩19編のみで使用されている。
- ③詩1編は形式上はいわゆるイロハ歌ではないが、冒頭の語がアレフに、最終語がタウに始まっており、この形式を意識している。詩119編は純正のイロハ歌形式の作品。
- ④双方ともトローラーを愛する(hps) 人物を描いている。
- ⑤双方とも義人と悪人を対照させる、知恵の思想的系譜に立っている。

このように見ると、詩編119編は1編に対応する作品として、特段の小集合や小詩集に属さない独立した宗教詩と考えることも可能であると考ええる。実際、この詩編には各8つの詩行よりなる22の段落に176節が記されており、それ自体で小詩集を構成しているとも言える⁵⁾。い

ずれにせよ、われわれは以前の論稿で文献史・編集史的な観点から詩編1-119編と120-150編の個別性について論じたが⁶⁾、旧約詩編を入念に推敲された編集体と見る立場から、詩編120編以下を、119編、あるいはそれまでの作品との関連性からまったく切り離された「補遺」と断じたわけではない。ではそこにはどのように継続するメッセージが確認されるであろうか。本稿では、この課題をめぐる諸家の見解、より具体的には旧約詩編第5巻の構造に関する見解を概観、整理し、われわれの議論を拡げる足がかりを得たい。

1. 議論の起点——G. H. Wilson

まずを取り上げるのは G. H. Wilson である⁷⁾。彼の研究は旧約詩編の編集史研究に関する分水嶺となったが、その彼もわれわれの問題について十分に説明できていないわけではない。彼は5巻よりなる旧約詩編を、1-89編と90-150編とに二分する。彼の見るところ、前半の作品群は「王の詩編」(詩2, 72, 89編)が区分の境界を示す。また表題も編集上の区分を暗示している。すなわち、二つのダビデ詩編やコラ詩編、アサフ詩編が比較的大きなまとまりとして各巻の主要な場所に配置されている。他方、後半はそうではなく、「王の詩編」の位置に対する関心も欠いているのだが、彼はこのまとまりに、「感謝せよ」(*hw dw*)に始まって「ハレルヤ」(*hllw jh*)に閉じられる構造を指摘する。

彼は、この主題および形態上の違いから、旧約詩編の編集に二つの異なる時代があったことを想定している。彼はこの根拠として、クムラン文書の詩編写本をあげる。というのも、よく知られているように、当該写本における作品の配列について、旧約詩編の第1-3巻に該当する部分はマソラ・テキストとの比較でそれほどの齟齬は見出されないが、第4-5巻にはそれが目立つからである。彼は、クムラン写本が筆記された前2世紀、旧約詩編前半の配列はすでに現在に近い形態を取り、後半はなお作業の途上にあったという考えに立っている⁸⁾。では、その後半のうち第5巻について、Wilson はどのような構成を想定したのであろうか。

Wilson は旧約詩編第5巻を、107-117, 118-135, 136-145編に三分し、146-150編は第5巻のみならず、旧約詩編全体の終結部として区別する。彼は、詩編107-117編と136-145編に共通する構成を見いだす。すなわち、双方とも「恵み深い主に感謝せよ」(詩107:1, 136:1)という同じフレーズに始まり、ダビデ詩編(詩108-110, 138-145編)が続き、ハレルヤ詩集で締め括られる(詩111-117, 146-150編)。そこで彼は詩編107-117編と136-145編をダビデ的な作品群と見なし、第5巻の本体がダビデ的な枠組みをもつと主張する。中央には長大なイロハ歌形式の詩編119編とマアロート歌集が置かれている。Wilson は第5巻の外枠となる詩編107編と145編が知恵の詩編であるとする。というのも、一見して知恵の詩編とは思われない107編は終結部(42-43節)に義人と悪人の対照や「知恵ある人」(*hkm*)という、知恵の術語を含んでいる。詩編145編にも終結部に近い19-20節に同様の語彙が見られる。Wilson は、この詩編145編が旧約詩編の劈頭を飾る1編と対応関係にあるとも述べ、この書全体を知恵の思想が性格づけると解するのである⁹⁾。

しかしながら、Wilson は知恵の思想が主要な位置を占めているとの提案をするものの、それが各作品の内容をどのように方向づけるか語るわけではない。また、この発見が、旧約詩編

の理解にどのような転換をもたらしたか、指し示もしない。そして、われわれの関心事である、詩編119編と120編以下のマアロート歌集との関係について議論を展開しているとは言えない。加えて、第5巻に記された諸作品が、その配列の中でどのようなメッセージを発信しているかにも踏み込んでいない。この点で、彼の研究は形態の表層的な観察にとどまっているとの批判を受けねばならない。

とはいうものの、旧約詩編の第5巻を三分割する Wilson の提案は、後の研究に大きな影響を与えている。たとえば、R. G. Kratz をあげることができる。彼も Wilson に近い旧約詩編第5巻の三部構成を考えている。彼が Wilson と異なるのは、第三番目の小詩集にハレルヤ詩集を組み込んで、136-150編とする点である。しかし第1部は詩編107-117編、第2部が118-135編と、Wilson と同じ構造を提示している。Kratz は各小詩集の担い手像について、いま少し厳密に論じている。すなわち、詩編108-110編のダビデ詩編に関して言うならば、それは後続の113編1節と116編16節で言及される「(主の) 僕」で、「神を畏れる」義人のグループに由来する、詩編111-112編に記されたエジプトからの救いに暗示された第二のエジプト脱出を経験した民である。この救いへの感謝が詩編118編に始まる第2部の主題であり、このセクションを締め括る135編でも強調されている。これが「主を畏れる」(詩118:4) 僕に示され、「正義の門」(118:19-20) からの入城が語られた後、詩編119編のトーラー遵守の姿勢に継承されて、エルサレム神殿への道につながる。マアロート詩編は、そこへと歩む僕の中に神殿の構想者であるダビデ(詩122, 124, 131-133編) や建設者であるソロモン(詩127編) が含まれていることを語っている。第3部には、彼によれば、ここまでの叙述を要約する機能がある。特に詩編137編を組み込むことにより、136編で語られた出エジプトと土地付与、そして敵からの救いの歴史に、バビロンからの帰還が付け加えられる。また、「僕」(136:22, 143:2, 12, 144:10) や「主を畏れる者」(詩145:19, 147:11) にも言及している。彼の読むところ、旧約詩編第5巻の第1部は、諸国から民を集めて苦しみから救ったこと、第2部は巡礼も含む聖所への導き、第3部は聖なる都に帰還した者たちに対する、創造と世界の保全という枠組みの中における配慮を主題としている¹⁰⁾。そして Kratz は、旧約詩編が申命記的歴史著述を含むネビイームと歴代誌的歴史著述に多くを負っていると指摘する¹¹⁾。Kratz が第5巻の意味を作品の流れの中から読み解こうと試みたことは評価できる。しかし、後に触れる Zenger も批判を加えているが、歴代誌の神学にあまりにも比重を置きすぎる点に懸念を覚える¹²⁾。筆者は、旧約詩編の成立を、思想史の面では歴代誌の神学的影響を超えた、より後代を考えるからである¹³⁾。

この第5巻を三部に分ける見方について、いま一人、M. Leuenberger にも触れておきたい。彼は旧約詩編第4-5巻の編集史について、長大な研究論文を仕上げた。本稿でその研究を詳述することはできないが、彼は基本的に Wilson の見解に倣い、旧約詩編を89編と90編とで二分し、90-150編を一つの編集体と捉える。そして厳密な文献史的分析に基づいて、旧約詩編第5巻の初期の構成体を、107-117, 118-135, 136-145編の三部とする。彼は各構成体が「感謝せよ」(*hwdw*) に導入されることを論じている¹⁴⁾。

このように Wilson の見解が当該領域の研究に及ぼした影響は小さくない。しかしながら、はたして詩編117編と118編、あるいは135編と136編とは切断されていると言えるのであろう

か。述べるまでもなく、詩編111-118編は一般に「エジプトのハレルヤ」と呼ばれ、一つのまとまりと見なされてきた¹⁵⁾。同様に詩編135編から137編までも、無表題作品として一括して読むことがふさわしいと思われる¹⁶⁾。つまり Wilson に発する旧約詩編第5巻の三分割法は、作品の連続性を遮断している点に根本的な問題をはらんでいる。

2. 一回的な祭儀用の作品群とする理解——M. D. Goulder

前項では Wilson による旧約詩編第5巻の三分割に触れ、作品の連続性に対する関心の低さを問題点としてあげた。この三分割について別の観点から論じているのが M. D. Goulder である¹⁷⁾。彼は旧約詩編テキストの配列に早くから関心を示し、第5巻を捕囚からの解放後に執行された祭儀のための典礼用の蒐集体と見ている。本項では、彼の理解を瞥見したい。

Goulder はまず表題に着目する。この蒐集体において最初に目にとまるのは、いわゆるマアロート歌集である。すなわち、繰り返すまでもなく、詩編120-134編の15作品にはすべて「マアロート」という表題が付されている。彼はその前後も小歌集と見なし、第5巻が三つの小詩集からなると述べる。この歌集を特徴づけるのは、第1部と第3部の構成が示す以下のような並行である¹⁸⁾。

- ①詩113-118編は「エジプトのハレルヤ」と呼ばれるまとまり。
- ②詩146-150編も同様に「ハレルヤ」を含む歌集。
- ③これらハレルヤ詩集の前にイロハ歌形式の詩編（詩111-112, 145編）を配置。
- ④その前にダビデ詩編（詩108-110, 138-145編）
- ⑤詩107編は長く捕囚からの解放を語る詩編と解された。同様に詩137編も冒頭でバビロンでの出来事に言及。

ここから Goulder は詩編107-118編を一つのまとまりと考える。彼はさらに詩編107編と第4巻に属する105-106編との関係にも言い及ぶ。これら三作品はいずれも出エジプトを扱う歴史的詩編で、彼はそれらの主題や言語の類似を指摘する。すなわち、詩編105編はアブラハムからカナン定住まで、106編はそれを少し後方にずらしているものの、エジプト脱出から捕囚までを語っている。ただし詩編106編は105編と異なり、歴史叙述と合わせてイスラエルの罪を強調した上で神の救いを述べ、「……諸国 (*gwjm*) の中からわたしたちを集めてください (*qbs*)。／聖なる御名に感謝……」というフレーズをもって締め括られている。Goulder によれば、これが詩編107編に継承されている。それは詩編107編3節が、「彼（主）が国々 (*ršwt*) の中から集めてくださった (*qbs*)」と応じているからである。また冒頭の、神への感謝を促す表現は詩編105-107編に共通している。それに加えて、詩編106編と107編には語り出しの「感謝せよ主に、恵み深いゆえに／その慈しみが永遠であるゆえに」(*hwdw lJhwh kj twb kj l'wlm ḥsdw*) が共通している。そこで彼はこれら三作品が連作であり、詩編105-106編が旧約詩編の第5巻に属するという、かなり大胆な仮説を提示する¹⁹⁾。したがって、Goulder にとっては詩編105-118編が旧約詩編第5巻の第1部となる。

Goulder は、第3部（詩135-150編）についても同じ観点から構成を分析している。巻頭となる詩編135-136編は明らかに歴史の詩編である。そして詩編136編の冒頭では、106, 107編と

同じく *hwdw lJhwh kj twb kj l'wlm hsdw* (感謝せよ主に、恵み深いゆえに／その慈しみが永遠であるゆえに) が記されている。つまり、彼が旧約詩編第5巻の第1部と第3部とする作品群は、冒頭に類似したフレーズをもつ歴史的詩編が配され、それにバビロンに関わる詩編とダビデ詩編とハレルヤ詩集が続くという、同じ構成になっているというのである²⁰⁾。

では、この分析で言及されない詩編119編の位置づけについてはどうなのだろうか。これはいうまでもなく「律法の詩編」として知られている作品である。Goulder はこれが詩編1編と対応関係にあると述べ、105-118編の後に119編が記されるように、135-150編の後に詩編1編から再び読まれるよう意図されていると主張する。そうして、この作品群が民族あるいは世界の始まりから出エジプト、土地付与、そしてバビロニアからの帰還の歴史(詩105-107, 135-137編)、苦難の現実認識(詩108-110, 138-145編)、神による救済への感謝(詩111-118, 146-150編)、律法への讃美(詩119, 1編)を教えるテキストと述べるのである。この流れは以下のようにまとめられる²¹⁾。

詩105-106編	詩135-136編	歴史の詩編
107	137	バビロンから帰還する捕囚民のための詩編
108-110	138-145	ダビデ詩編
111, 112	145	イロハ歌形式の詩編
113-118	146-150	ハレルヤ詩編
119	1	律法の賛美

では、Goulder はこのまとまりがテキストとしてどのような機能を生むと考えているのだろうか。詩編105-118編について見ておきたい。繰り返しとなるが、詩編107編以下を旧約詩編第5巻とする伝統的な区分に逆らって、Goulder は105-106編を付加した。彼によれば、この接合によってかたち造られるテキスト群は、出エジプト記12章以下の出来事に対応している。エジプト脱出の出来事はニサン(アビブ)の月の第15日に始まる。述べるまでもなく、これを申命記の伝承は7日にわたる「酵母を入れないパン」の祭儀と合流させている(申命記16:1-8)。そこで Goulder は、14作品からなる詩編105-118編のまとまりがこの祭儀に際し、そのストーリーに合わせて、以下の手順で読まれたと推測する²²⁾。

ニサンの月	出来事	夕べの祭儀	朝の祭儀
第15日	エジプト脱出	詩105編	詩106編
16	スコトへの旅	107	108
17	エタムでの宿営	109	110
18	ピ・ハヒロトでの宿営	111	112
19	海の二分	113	114
20	エジプト軍の溺没	115	116
21	海の歌	117	118

この作品群が編纂された時期について、Goulder はエズラ記 6 章が語る第二神殿建立の時期を想定する。すなわち、エズラ記 6 章 15 節は神殿が「ダレイオス王の治世第 6 年のアダルの月の 23 日に完成した」ことを述べ、同 19 節はその翌月である「第 1 の月」の第 14 日に過越祭を守ったことを告げている。Goulder は詩編 105-118 編のまとまりが、第二の出エジプトを記念するこの時のために成立したと見る²³⁾。このまとまりが、過越祭で読まれる詩編 113 編以下の「エジプトのハレルヤ」を含むこともそれを支える材料となるかもしれない。

Goulder の考察は、この作品群が用いられたであろうただ一回だけの機会における祭儀について想像力を駆使している。彼はマアロート歌集についても同様にネヘミヤ時代の具体的な出来事を「生の座」と考えている²⁴⁾。しかしこれらのまとまりが、彼が述べる状況で編纂され、朗読されたという客観的な根拠はどこにもない。また実際のところ旧約詩編の各作品は繰り返し読まれ、それぞれの状況で解釈され、かなりの時間を経て現在の形態に整えられたと思われる。何よりもクムランの詩編写本はマソラ・テキストと異なる配列を示している。われわれの手元には、旧約詩編の第 5 巻にあたるテキストが、ネヘミヤより後の時代である前 2 世紀には別の順序で読まれていた痕跡が残されている²⁵⁾。たとえ第 5 巻の小詩集が彼の言う通り、一回的な祭儀に用いるとの意図で作成されたとしても、Goulder はそれらの作品群が現在の文脈に組み込まれた意義について説明できていない。詩編 119 編と 120 編、あるいは 134 編と 135 編との関わりについても論じていない。これでは旧約詩編第 5 巻は無意図的に小詩編を並べたテキストということになってしまう。その他、詩編 119 編と 1 編との対応についても（両作品が同根的な作品であることは明白であるとしても）、旧約詩編第 1 巻との対応を検討しないまま語ることはできないと考える。

3. 神殿の神学との関連——E. Zenger

前項では Goulder の見解を紹介し、旧約詩編第 5 巻の生の座を一回の出来事に固定しようとする彼の分析法に疑義を呈した。本項では E. Zenger の理解を取り上げる。

彼はまず、詩編 107 編と 145 編をこの編集体の外枠と見る。それは両作品が共に「人の子ら」(*bnj'dm*) を強調しているからである。すなわち、この語は詩編 107 編ではリフレインにあたる 8, 15, 21, 31 節に 4 回用いられている。詩編 145 編では 1 回に過ぎないが、Zenger はこれが作品の中央である 12 節に置かれていることを強調する。彼はこの語が、ヤハウェへの讃美において可能となるすべての民の連帯を語ると述べる²⁶⁾。その他にも「慈しみ」(*hsd*)、「奇しき業」(*npl'wt*)、「救い」(*js'*)、「永遠に」(*l'lm*) をあげ、両作品の関連性を印象づける。Zenger は両者の異なる要素として、詩編 107 編がイスラエルへの救いを具体的に述べるのに対し、145 編はすべての人をその対象としていることをあげる。これはわれわれの理解するところでは、テキスト上の対立ではなく、メッセージを「進展」²⁷⁾ させる要素であり、両者の非連関性ではなく、連関性を示すモチーフとして記憶にとどめるべきであろう。彼は詩編 107 編の後にダビデ詩編（詩 108-110 編）とイロハ歌形式の作品（詩 111-112 編）が接合されていることに注意を促す。これら二つの集合体が「悪しき者」(*rs'*) の用法においてつながっているというのである²⁸⁾。ちなみに、この敵対者の術語は、詩編 113-118 編と 120-137 編では使われていない（詩

129:4は例外)。

続く詩編113-118編はハレルヤ詩集であるが、エジプト脱出を主題としている。詩編118編は出エジプトの終着点として、シオンの聖所に焦点を定めている。これに続く詩編120編以下のマアロート歌集は、シオンを、イスラエルが巡礼すべき祝福と救済の場として言祝いでいる。詩編135編の冒頭は、仮庵祭を生ける座とするマアロート歌集の掉尾を飾る134編の語彙を引き継いでおり、かつ136編ともモチーフを共有している。それゆえ Zenger は、詩編135-136編がマアロート詩編と密接な関わりにあることを指摘する。その次に置かれた詩編137編はマアロート歌集の神学的な注解である。詩編138編は137編に対する応答で、ここから始まるダビデ詩編の最後にイロハ歌形式の145編が付されている。

以上、Zenger は、旧約詩編の第5巻を大きく107-112, 113-118, 120-137, 138-145編の集合に分ける。そうして詩編119編はこの前半と後半とをつなぐ位置に置かれる。Zenger はこの長大な詩編がクムラン文書の詩編写本 (11QP^s_a) においても中央にあることを指摘し、これが旧約詩編第5巻の中心であることを強調する。彼の主張は次のような図式にまとめられる。

- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| a. 王 (ダビデ) の詩編とイロハ歌形式 (終末論的作品) | 詩107, 108-110, 111-112編 |
| b. 出エジプト (過越祭) | 詩113-118編 |
| c. トーラー (安息日) = イロハ歌形式 | 詩119編 |
| b. シオン (仮庵祭) | 詩120-136, 137編 |
| a. 王 (ダビデ) の詩編とイロハ歌形式 (終末論的作品) | 詩138-144, 145編 |

Zenger は、上に示したように、外枠がダビデ詩編とイロハ歌形式の作品を記す交差配列的な図式を提示した。この外枠は一見対応している。彼は、詩編108-110編 (a) が人間の王にヤハウェの助けを得た宇宙的支配を約束する一方、138-144編 (a) の「主の僕」たる王は宇宙的支配を行うヤハウェの助けのもとにあり、これはイスラエルを表しているとする。ここにもある種の論理の「進展」を認められる。すなわち、後半のダビデ詩編 (a) ではヤハウェの関与の度合いが、前半のダビデ詩編 (a) におけるよりも高められている。続くイロハ歌形式の作品 (詩111-112, 145編) は終末論的・メシア的な幻を語り、前段で述べられたヤハウェによる関与の必然性を補強している。そして彼は、内枠を構成する二つの典礼的な小詩集 (詩113-118編 = b, 120-136 + 137編 = b) がそれぞれ終結部 (詩118:1, 29, 136:1, 26) で「感謝せよ主に、恵み深いゆえに／その慈しみが永遠であるゆえに」(*hw dw l'Jhwh kj t'wb kj l'im hsdw*) を共有していることを指摘し、それぞれにシオンから祝福する、宇宙的なイスラエルの神の国の開始点を示していると述べる。また中央に置かれた詩編119編が、トーラーを守り愛するための恵みを求める祈りと性格づける。これによって終末論的な神の国が到来する、と。Zenger は、これら個人の祈りが現在の文脈に置かれることにより、イスラエルと世界の祈りとなると述べる²⁹⁾。彼は、この図式が過越祭、安息日、仮庵祭と主要な祭儀を網羅し、神殿の機能を理解できる構造になっているとし、旧約詩編が最終的に「聖所」(Heiligtum) に代わる役割を果たしたと主張するのである³⁰⁾。

Zenger の提案は、詩編113-118編とマアロート歌集およびそれに続く無表題作品（詩120-137編）とが終結部分以外、どのような語彙やモチーフ、あるいは思想のレベルで対応するのか、十分に論じられているとは言えない。加えて、詩編119編が中央に位置するとしても、これがその前後の作品群とどのように関わっているのか、彼が通例は詳述する作品間の単語やフレーズの一致に今回はあまり言及していないことが、彼の提言をかえって不自然に思わせ、その勢いを弱めている。また最近、詩編119編に関する包括的な研究を著した K. A. Reynolds は、Zenger が119編を旧約詩編第5巻の中央に据えながら、その文脈にトーラーという主題を明快に位置づけていないことに疑義を呈している³¹⁾。それは旧約詩編第5巻が提示する「神の国」の問題とトーラーの関係であり、Reynolds は神がその国を到来させる前提として詩編119編が律法遵守の姿勢を語り、さらにその義務感を超えて、喜びをもって「モーセの律法」ではなく、「主の律法」（詩1, 19, 119編）に生きる者を描いていると述べ、Zenger の図式に批判を加えている。

われわれもこの批判に与するものであるが、しかしながら、Zenger が指摘する二つの「進展」——「人の子」の用法の変化（詩107, 145編）、王とヤハウエの関わりの変化（詩108-110, 138-145編）——は、われわれがこのテキストの構造を解いていく鍵を提供すると期待される。ただし、彼は、われわれが「進展」と見たテキスト上の特徴を、構造的な観点から相違点として提示しているのみで、積極的に解釈のポイントとする自覚はない。この意味作用を究明するためには、旧約詩編の配列に留意し、テキストの結束性を丁寧に検証する必要がある。われわれは、本項ではその指摘にとどめ、他の分析をさらうこととしたい。

4. 詩編119編と120編以下の文脈——K. Nielsen

多くの研究者が詩編119編と120編以下の関係について正面から議論していないのに対し、K. Nielsen は果敢に説明を試みていると言える³²⁾。彼女はまず D. L. Crow によるマアロート歌集の理解を援用する³³⁾。すなわち、Crow はこの歌集が二人の編集者により、ペルシア支配の時代に成立したと主張する。この二名のうち、一人は北イスラエル出身の農民で、この歌集に含まれる諸作品のオリジナル部分を執筆した。もう一人はエルサレム神殿で旧約詩編の編集に携わる信徒で、既存作品にエルサレム神殿への巡礼を続けるようペルシア時代における北の住民を説得するための新たなメッセージを書き加えたという。Nielsen は、ペルシア時代という年代設定には疑義を呈しながらも、巡礼奨励という目的には関心を寄せる。Nielsen の考えると、この奨励はユダヤ人の間にエルサレムへの巡礼をめぐる共通認識がなかったゆえに発せられたものである。彼女は、ミカ書6章8節の語る「主が何を求めているか——正しくへりくだって歩むこと」をどのように実践できるかというユダヤ人が総じて問い続けた事柄について、詩編119編とマアロート歌集とが個別のアプローチをしたと考える。すなわち、詩編119編は「主の律法に歩む人は幸い」と倫理的な役割を述べてトーラーそのものを、マアロート歌集の編者はエルサレム神殿への巡礼を強調したと述べる。つまり詩編119編とマアロート歌集とは、同じ問いに異なる応答をしており、このような対話的機能のゆえに、両者が並置されているというのである³⁴⁾。

Nielsen は、両者の連関性の根拠として、「道」の隠喩をあげる。彼女は詩編119編が最初の段落である1-8節（アレフ詩行）に「歩く」（*hlk*）と「道」（*drk*）が、それぞれ1, 3節に2回ずつ用いられることを始め、道の語彙が多用されていることを指摘する。すなわち他に *hlc* は1回、*drk* は12回（動詞1回を含む）、他に「道」の語彙に数えられる *'rh* が5回、*ntjb* が1回、同根語の *ntjbh* が1回である。また「足」（*rgl*）も3回。その他、作品の最終節である176節にある「小羊のように（道を）失う（*t'h*）」という表現も、10節の *šnh* や67節の *šgg*（新共同訳では双方とも「迷い出る」と訳出）とあいまって、同じ語群に数えることができると主張する³⁵⁾。マアロート歌集に「道」の語彙が多数見られるわけではないが、この作品集それ自体が、ヤハウエへと繋がる道を模索していたことは疑いなく、連関性を考えることは可能である。

この背景について、Nielsen は次のような説明を試みている。捕囚後の数世紀にユダヤ人の間でさまざまな立場が誕生し、神との交わりに関して自らの居住環境にかなった考えを表明していった。旧約詩編の編集者は、自らがまとめる書が、それら多様なグループすべてにとって有用なものとなるよう志した。そこでこの詩集に異なる視点を挟み込んだ。彼女は、編集者たちのとった手法が、異なる見方についての注解書として機能していると述べ、クムラン宗団とディアスポラとが巡礼について対極にあったことに注意を促す。すなわち、クムラン宗団は信仰なき祭司が牛耳るエルサレムへの巡礼を拒否した。他方、ディアスポラは遠く隔てられた地にあったため、特別な機会には巡礼を実行した。しかし両者とも、日常においては、トーラーによって導かれる信仰生活を守った。つまりその人々にとって、詩編119編の「道」のイメージは、ヤハウエのトーラーに従う歩みが、人生全体を敬虔な巡礼とすることを示す。別の信仰者たちにとって、巡礼は重要な意味をもった。それゆえ、詩編119編と120編以下のマアロート歌集が接続される必要があったというのである³⁶⁾。

Nielsen の説明は、詩編119編とマアロート歌集との関係についてに限定されており、そのテキスト群を超えて続く135-137編の無表題作品や138編以下のダビデ詩編、146編以下のハレルヤ詩集との連続性を十分明らかにしているとは言えない。そのため、「並置」の理由を説明したかに見えるが、最終的に旧約詩編の第5巻、あるいは旧約詩編全体がいかなるメッセージを語っているのかについて示唆さえ行っていない。またミカ書への言及には（まったく誤りだとは思わないが）、ペルシア時代になぜこのテキストなのかと、唐突感をぬぐえない。しかし、彼女の立てた議論は、旧約詩編の編集者が多様な信仰の立場の乱立に苦しみ、それらの共生を目指したというわれわれの立場と重なる³⁷⁾。また、詩編119編と120編との間に内容的な区切りと連続性が明確に存することを主張するものであり、この点を受容しつつ、われわれの旧約詩編第5巻の理解を深めることがゆるされると考える。

5. 評価と課題

本稿では、旧約詩編第5巻（詩107-150編）のより細密な理解のために、これまでに積み重ねられてきた議論を瞥見した。われわれはまず Wilson を取り上げ、彼が当該テキストを詩編107-117, 118-135, 136-145編の三部に分割したことを確認した。この見解に対して、Kratz や最近の Leuenberger が類似した解釈を示していることを述べた。Wilson の場合、第1部と第3

部の様式上の類似、すなわち「感謝」に始まり「ダビデ詩編」をはさんで「ハレルヤ歌集」で閉じられるパターンを提示し、それが第2部の作品を囲い込む構造を想定したのである。しかしこの図式では、まずダビデ詩編とハレルヤの不均衡が問題とされる。ダビデ詩編は、第1部では詩編108-110編の3作品であるが、第3部では138-144編までの7作品、そしてハレルヤは第1部では111-117編までの7作品、第3部では145編のみである。しかも詩編145編は表題にダビデ詩編であることを表す *ldwd* が付されており、この点でも苦しい説明をしなければならない。詩編136-150編を第3部とする Kratz の解釈はその問題を解消させるが、歴代誌の担い手に思想的ルーツを負わせることに疑義を指摘した。続いて、捕囚後に一回的な成立を考える Goulder について論じた。彼は旧約詩編第5巻の起点を105編に置くなど奇抜な提案をした。筆者は作品の出目を一回の出来事に限定したその手法に賛意を示すことはできないが、彼がマァロート歌集を独立した作品群と解し、その前後にあたる詩編119編と120編、および134編と135編に小詩集の区切りを置いた点は分かりやすい判断として評価した。Zenger は交差配列的な図式を提案した。しかし各対応部の内容的連関性の問題、あるいはトラーの位置づけをめぐる問題など、十分に説得ある議論になっているとは言えない。とはいえ、モチーフの「進展」については、耳を傾けるべきものがあると考え。最後に取り上げた Nielsen は、もともと旧約詩編第5巻全体を視野に納めた研究ではないため、議論そのものが限定されていて、広がり欠ける。しかし詩編119編と120編以下が、単に関連しているということではなく、見解の対立を抱えながら、それゆえにこそ連続した位置に置かれていることを論じている。これは、Goulder とは別のかたちで詩編119編と120編との間に大きな区切りが存していることを物語るもので、われわれはここに重要な示唆を見る。

ここで本稿の研究史に取り上げなかったが、K. Koch についても言及しておきたい³⁸⁾。Koch は旧約詩編第5巻が表題を明示する作品群を含んでいることを指摘する。それは繰り返すまでもなく、詩編108, 120, 138編に始まるダビデ詩編とマァロート歌集である。彼が見るところ、これらの詩集は長短の違いはあるが、ハレルヤ詩集が後続するところが共通する（詩111-117, 135-136, 146-150編）。彼は詩編107編と118編が「感謝せよ」（*hw dw*）に始まる作品で、これがインクルージオを形成する小詩集を抽出して第1部とし、続いてマァロート歌集とハレルヤ詩編による第2部（詩120-136編）、ダビデ詩編とハレルヤ詩集がつながる第3部（詩138-150編）からなる三つの部分を指摘した。Koch はここから外れる詩編119編と137編を後代の付加と結論づける。さらにマァロート歌集が二つのダビデ詩編とハレルヤ詩集との接合による集合体の連続性を阻害しているとして、詩編107-118編と138-150編だけをオリジナルの作品群であると述べる。彼の見解では最終形態を論ずることができず、今日的な課題に応答していない。それゆえわれわれはこの提案を前世紀的な史的・批判的研究の陥穽として退けざるを得ない³⁹⁾。しかし表題を小詩集識別の指標する手法は実に素朴、明瞭かつ堅実で、古代の人々の残したテキストに取り組む姿勢としてふさわしい。

いずれにせよ、旧約詩編の第5巻は多様な小詩集の集成である。すなわち、二つのダビデ詩編（詩108-110, 138-145編）とハレルヤ詩集（詩113-118, 146-150編）、マァロート歌集（詩120-134編）。他に、無表題歌（詩135-137編）のような小集合もある。ここまでの研究を顧み

での所感は、諸家が無理に小詩集を「創作」しようと骨折りを重ねた、ということである。その点で、Koch がまず指摘したように、すでにこの文書が含む同一表題のもとに集められた小詩集を活用すべきではないのか。旧約詩編には、第1巻には第1ダビデ詩編、第2巻にはコラ詩編と第2ダビデ詩編、第3巻にはアサフ詩編、第4巻には王の詩編と第3ダビデ詩編と、核となる小詩集があった。第5巻にはその詩集がないと思われたわけであるが、この巻は他のそれと比べて、極端に長い。他の4巻中で最長の第1巻が41作品であり、第5巻はそれにまさる44作品である。第3、4巻は17作品に過ぎない。そうであるならば、第5巻は量的にそれらの倍以上であり、通常の詩編の22作品分といえる詩編119編を考慮するならば、その差はさらに広がる。それゆえ、第5巻を無理にコンパクトな構造に押し込めるのではなく、すでに認識されている小詩集に着目して、多様な立場を集積した作品群と捉えることが実情にかなっているのではないか。しかしどのような場合であっても、旧約詩編を連作的な「読み物」と解し、作品間の結束性を解釈の基本とする姿勢に変化はない。

以上、これまでの研究に対する批判的要約と考察を記した。以下に改めてこのテキストに対するわれわれの認識を述べ、その上で今後の指針と課題を記す。

- 1) 作品間の結束性を研究する中で旧約詩編第5巻のメッセージを探究することを基本とする。その探究は作品間、続いて各小集合、小詩集の単位で行い、その後に全体へと並行移動させる。
- 2) 旧約詩編第5巻には表題によってまとめられる、いくつもの小詩集がある。すなわち、二つのダビデ詩編（詩108-110, 138-145編）、ハレルヤ詩集（詩113-117, 146-150編）、マアロート歌集（詩120-134編）。他に、無表題歌（詩107, 118, 119, 135-137編）。これらを基本単位として分析を行う。
- 3) 詩編119編は、独立した作品と考える。
- 4) マアロート歌集はクムラン文書以前にさかのぼる既存の詩集と解する⁴⁰⁾。K. Seybold⁴¹⁾らはこれが詩編135-137編の無表題詩編と結合された蒐集体と見たが、われわれは個別の小詩集を優先する基本姿勢から、マアロート歌集と詩編135-137編を区別する。
- 5) Zenger から示唆を受けた二つの「進展」を解釈の鍵とする。

旧約詩編の第5巻は、ダビデ詩編、マアロート歌集、ハレルヤ詩集といった表題や特徴的な単語から類推される小集合によって構成される。しかし各小集合はそれぞれ形式も長さも一定ではない。これはそれぞれの小集合がもともと第5巻に配置するため計画的に編纂されたのではないことを示している。それゆえ、各小集合が個別に分析され、最終的に旧約詩編第5巻のメッセージを考察するためにそれらのデータを統合するという手順が望ましいと思われる。われわれはすでにマアロート歌集（詩120-134編）、無表題作品（詩135-137編）、ダビデ詩編（詩138-145編）、ハレルヤ詩集（詩146-150編）を個別に取り上げてきた。今後は、詩編107-119編の分析が課題となる。それは当該テキストに含まれる小集合が発するメッセージと、またそれが後続作品とどのような連動を示しているかを明らかにすることである。

注

- 1) 拙著『旧約詩編の文献学的研究』新教出版社、2006年
- 2) 拙論「マアロト歌集（詩120～134編）と旧約詩編の文脈——序説」『神戸女学院大学論集』（以下『論集』）53/2（2006）、1-17頁。同「ダビデ詩編卷末の歌——詩編145編の文献学的考察」『神戸女学院大学論集』54/2（2007）17-33頁。同「三つの無表題詩編（詩135-137編）」『論集』55/1（2008）、9-24頁。同「神殿に立ち、神殿を築く——詩編138編の文献学的考察」『論集』55/2（2008）1-13頁。同「彷徨する詩人——詩編139編の構造と主題」『論集』56/1（2009）35-51頁。同「第5ダビデ詩集（詩138-145編）の主題と構造」『論集』57/1（2010）、1-14頁。同「詩編146編の主題とハレルヤ詩集（詩146-150編）の文脈」『論集』57/2（2010）、25-40頁。
- 3) C. Westermann, Zur Sammlung des Psalters, in: ders., *Forschung am Alten Testament. Gesammelte Studien*, 1964, S. 336-343 (= in: *Theologia Viatorum* 8 [1961/62], S. 278-284). 拙論「詩編」池田裕他編『新版 総説 旧約聖書』日本基督教団出版局、2007年、421-437頁、426-427頁。
- 4) たとえば、R. G. Kratz, Die Tora Davids. Psalm 1 und die doxologische fünfteilung des Psalters, *ZThK* 93 (1996), S. 1-34, S. 8ff. を見よ。
- 5) 詩編119編の外形的データについては、D. N. Freedman, *Psalm 119 the Exaltation of Torah*, 1999が詳しい。この書は基本的に論文集であるが、この詩編の構造や語彙の使用頻度など詳細な研究を記している。
- 6) 注2に記した『論集』53/2の拙論、3-6頁。
- 7) G. H. Wilson, *The Editing of the Hebrew Psalter* (SBLDS 76), 1985; G. H. Wilson, Shaping the Psalter: A Consideration of Editorial Linkage in the Book of Psalms, in: J. C. McCann (ed.), *The Shape of the Psalter* (JSOTS 159), 1993, pp. 72-82.
- 8) Wilson, 1993, pp. 73f. この議論については注1の拙著、pp. 6-12を見よ。
- 9) Wilson, *ibid.*, pp. 78-80.
- 10) R. G. Kratz, *a.a.O.*, S. 24-26.
- 11) *A.a.o.*, S. 28.
- 12) E. Zenger, The Composition and Theology of the Fifth Book of Psalms. Psalms 107-145, *JSOT* 80 (1998), pp. 77-102, p. 87.
- 13) 死海文書の詩編写本（11QP^a）の配列が旧約詩編第5巻と著しく異なることを顧慮すると、その成立を歴代誌のグループに関係づけることは困難であると思われる。注1の拙著、275-287頁では詩編33編を手がかりに、旧約詩編の編集時期を前2世紀以降と後1世紀中頃以降とに想定している。
- 14) M. Leuenberger, *Konzeptionen des Königtum Gottes im Psalter. Untersuchungen zu Komposition und Redaktion der theokratischen Bücher IV-V im Psalter*, 2004, S. 276ff. 第5巻では、詩107:1, 118:1, 136:1が「感謝せよ」（*hwdw*）に導入される。
- 15) 「エジプトのハレルヤ」（*hll' mšr'h*）という呼称については、m. Pes. 118a, b. Ber. 56aを参照。さらにM. Millard, *Die Komposition des Psalters*, 1994, S. 30-32を見よ。
- 16) 筆者は注2に記した『論集』55/1の拙論で、詩135-137編の結束性を論じている。
- 17) M. D. Goulder, *The Psalms of the Return. Book V, Psalms 107-150* (JSOTS 258), 1998
- 18) *Ibid.*, p. 14.
- 19) *Ibid.*, pp. 192-196.
- 20) *Ibid.*, pp. 212-214.
- 21) *Ibid.*, pp. 15-17.
- 22) *Ibid.*, pp. 194-196.
- 23) *Ibid.*, pp. 197-198.
- 24) M. D. Goulder, The Songs of Ascents and Nehemia, *JSOT* 75 (1997), pp. 43-58. さらに注2に記した『論集』53/2の拙論の11-12頁を参照。
- 25) 注1の拙著、2頁の注3を参照。
- 26) Zengerとは異なり、筆者は詩145:12の「人の子ら」（*bnj 'dm*）が、ヤハウエの「聖徒ら」（*hšjdm*）に

- 従属する位置にあること、したがってさほど重要な意味を与えられていないことを指摘している。注 2 に記した『論集』54/2の拙論、23頁を参照。
- 27) 筆者はこの概念を文芸学的方法の鍵として提示した。注 1 の拙著、38-39頁を見よ。
- 28) Zenger, *ibid.*, pp. 88-91.
- 29) *Ibid.*, pp. 98-99.
- 30) Zenger, Der Psalter als Buch. Beobachtungen zu seiner Entstehung Komposition und Funktion, in: ders. (Hg.), *Der Psalter in Judentum und Christentum* (FS N. Lohfink), 1998, S. 1-57の第3章 (S. 35ff.) のみが、ders., Der Psalter als Heiligtum, in: B. Ego-A. Lange-P. Pilhofer (Hg.), *Gemeinde ohne Tempel / Community without Temple. Zur Substituierung und Transformation des Jerusalemer Tempels und seines Kults im Altentestament, antiken Judentum und frühen Christentum* (WUNT 118), 1999, S. 115-130に再録されている。
- 31) K. A. Reynolds, *Torah as Teacher. The Exemplary Torah Student in Psalm 119*, 2010, pp. 155f.
- 32) K. Nielsen, Why not Plough with an Ox and an Ass Together? Or: Why not Read Ps. 119 Together with Pss. 120-134?, *Scandinavian Journal of the Old Testament* 14 (2000), pp. 56-66.
- 33) L. D. Crow, *The Songs of Ascents (Psalms 120-134)*, 1996. 邦語では筆者が、注 2 に記した『論集』53/2の拙論、14頁で簡潔に紹介し、批判を加えた。
- 34) Nielsen, *ibid.* p. 61.
- 35) 詩119編に、*hlk* は1, 3, 45節の3回、*drk* は1, 3, 5, 14, 26f., 29f., 32f., 35, 37, 59, 168節の13回 (35節は動詞)。*'rh* は9, 15, 101, 104, 128節の5回。*ntjb* は35節、*ntybh* は105節のそれぞれ1回ずつ。*rgl* は59, 101, 105節の3回。さらに cf. Nielsen, *ibid.*, p. 63.
- 36) Nielsen, *ibid.*, pp. 64f.
- 37) 注 1 の拙著、223-227頁を参照。
- 38) K. Koch, Der Psalter und seine Redaktionsgeschichte, in: K. Seybold, E. Zenger (Hg.), *Neue Wege der Psalmenforschung*, 1995, S. 243-277.
- 39) 筆者はこのような史的・批判的方法の問題点を「分断主義」と呼んで批判を加え、その克服の道を文芸学的方法を整理する中で展開した。注 1 の拙著、32-41頁を参照。
- 40) 旧約テキストにこの歌集が実際の巡礼に用いられたとする記述はないが、タルムードのサッカー5:4, ミッドート2:5に言及されており、伝統の中で語られていたと考える。注 2 に記した『論集』53/2の拙論、6-7頁を参照。
- 41) K. Seybold, *Die Wallfahrtspsalmen*, 1978. 前掲の拙論、13-14頁を見よ。

(原稿受理日 2013年9月30日)